

令和 3 年 5 月 27 日現在

機関番号：24303

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2020

課題番号：26861989

研究課題名（和文）限界集落で暮らし続ける独居高齢者を支える要因の検討

研究課題名（英文）Examination of Factors Related to support Elderly People Living Alone in Marginal Communities

研究代表者

村上 佳栄子 (KAEKO, MURAKAMI)

京都府立医科大学・医学部・助教

研究者番号：30584867

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、限界集落で暮らし続ける独居高齢者の生を支えるプロセスを明らかにし、支援の方向性を探求することを目的とした。

結論として、限界集落の独居高齢者の暮らしを支える要因は、対象者が健康の保持増進を目的とした保健行動に取り組んでおり、コミュニティを通して自らソーシャル・キャピタルを形成していたことの重要性を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、これまで明らかにされてこなかった限界集落の独居高齢者に焦点を当て、質的調査により、生を支えるプロセス要因について検討を行った。分析結果は、今後、集落単位における支援体制を検討する際において、基礎資料となることが期待できる。これらの知見は、地域の健康づくり及びコミュニティ形成に予防的介入の実践への進展に貢献することができると考える。

研究成果の概要（英文）： This study aimed to clarify the processes that support the life of elderly people living alone who continue to reside in marginal communities, and to investigate the directionality of support within such communities.

In conclusion, the study revealed the importance of the following two factors in supporting elderly people living alone in marginal communities: participants engaged in health behaviors aimed at maintaining and improving their health; participants created their own social capital through their community.

研究分野：地域看護学

キーワード：限界集落 独居高齢者

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、日本では、総人口が減少するなかで高齢者の増加に伴い、人口の高齢化が急速に進行している。高齢化率は、平成 20 年に 22% を超え、超高齢社会に突入し、平成 25 年には、25.1%<sup>1)</sup>(総務省、2012) と上昇傾向にある。また現役世代(20-64 歳) 2.6 人(平成 22 年)で 1 人の高齢者を支えているが 50 年後は、現役世代 1.2 人で 1 人の高齢者を支える社会が到来し、4 人に 1 人が 75 歳以上と予測されている<sup>2)</sup>(内閣府、2013)。平均寿命は、男性 79.94 歳、女性 86.41 歳<sup>3)</sup>(厚生労働統計協会、2013)であり、ともに延伸し続けている。その背景には、医学や医療の進歩とともに、健康増進の推進や介護予防対策の重点的な取り組みがあると考えられる。そのなかでも、社会的共同生活の機能を維持することが困難な“限界集落<sup>4)</sup>”問題が指摘されている。

(2) コミュニティの機能には、地域性(濱嶋ほか、2012)と共同性(濱嶋ほか、2012/大澤ほか、2012)が最低限必要な共通項とされ、地域における相互扶助機能、地域文化維持機能、総合利害調整機能の役割(山内、2009)が求められる。さらに、農村型コミュニティの形成原理には共同体的な一体意識や集団の内部に同質的な結びつきがある(広井、2009)との指摘から、つながり性という性質が伺える。限界集落におけるコミュニティは、社会的共同生活の維持が困難な状態を特徴とし、公共ならびに民間サービスの縮小化・交通機関不足・地域医療や福祉サービスの資源不足問題が生じている。

## 2. 研究の目的

本研究は、限界集落で暮らし続ける独居高齢者の生を支えるプロセスをコミュニティとの関連に注目して明らかにすることを目的とした。

## 3. 研究の方法

### (1) 調査方法

研究参加者は、平成 25 年 4 月時点で当該集落で生活していた後期高齢者 75 歳以上の独居高齢者である。X 市に研究の趣旨と調査協力の依頼を文書及び口頭で行い、承諾を得た。研究者が、直接、調査協力の依頼を文書及び口頭で説明し、同意書の署名をもって研究参加者とした。

### (2) 分析方法

Grounded Theory Approach<sup>20)</sup>による分析手法を用いた。対象者 5 名のインタビュー内容から逐語録を作成し、データの 239 個のラベルからさらに共通する要素を統合し、最終的には 11 のサブカテゴリに依拠する 5 つカテゴリを抽出した。また分析の過程においては、質的研究の学術論文をまとめた経験のある研究者と検討を重ね、分析結果におけるカテゴリ名の表現・枠組みの妥当性・真実性に努めた。

## 4. 研究成果

(1) カテゴリ関連図をもとにパラダイムを統合させた結果、カテゴリは《健康への不安と対処》、《生活への適応力》、《生きる上での喜び》、《コミュニティで支えられた生》《コミュニティの継承の願いと行動化》の 5 つの現象に集約された。

(2) 本研究では、人々とコミュニティとの関連におけるプロセスとして、これまで培ってきた前向きな態度を用いて、【健康への不安と対処】に直面しながら自立とのバランスを保ち、この土地で出来るだけ生きる意思へ至るストーリーが導かれた。

(3) コミュニティは、先祖や家族・近隣の人や土地を通じた人とのつながりをもたすことで、限界集落の独居高齢者にとって住み慣れた環境で自分の生活ができる居場所として捉えられる可能性が高いと考えられる。

(4)これらを通して、限界集落という地域性のなかで、互いを気遣い合えるつながりという関係性を自ら自己形成し、さらに地域を次世代につないでいきたい思いが明らかになった。生活を通して対象者が形成してきたコミュニティとの相互作用は、生きていくうえでの支えとなっていることが示唆される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------